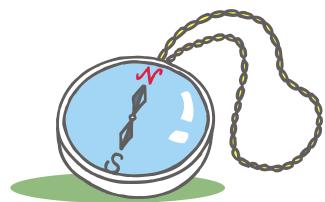


羅針盤



第 25 号 令和3年(2021年)12月6日(月)

◆ 将棋は奥が深くて、どれだけ考えてもわからない

これまでに、王位、竜王、棋聖の3つのタイトルを制してきた将棋の藤井聰太三冠が、先月行われた竜王戦七番勝負で苦手としてきた豊島正将之竜王を下して、竜王位を奪取したことは将棋の世界では新たなる快挙として報道されました。史上最年少19歳3か月での四冠達成で、棋士としての序列でも1位となり、将棋界では最高峰のタイトルでもある竜王を得ての結果という前人未到の領域にまで踏み込んだ感があります。しかし、一方では、藤井聰太四冠自身の感想はといえば、最高峰のタイトル獲得にも「幸運でした」と語っておられて、更には「将棋は奥が深くて、どれだけ考えてもわからない」と答えています。将棋が強くなるためには、どれだけ結果を出しても「探求し続けること」であると考えておられます。このことは、実は藤井聰太竜王が19歳3か月といった新記録をつくるまでの間、記録を保持していた将棋の世界ではレジェンドとも言われている羽生善治九段も同じような言葉で答えている場面があります。彼もまた前人未到の永世七冠という快挙を達成した棋士ですが、同じく永世七冠を得たときに「将棋はわからない」と答えています。頂点を極めた天才棋士であるこの二人が「将棋はわからない」と答える意味。それは、「将棋は奥が深くて、どれだけ考えてもわからないものではあるが、一局ずつ指すごとに新しい発見を与えてくれている」という、藤井聰太四冠の言葉にその本質がうかがえると思います。19歳にして圧倒的な強さで強豪たちをなぎ倒して棋士No. 1となった藤井竜王と、永世七冠に加えてタイトル99期といった記録を打ち立てた羽生九段。将棋が強く、そして深く知る二人が、揃って「わからない」というこの言葉の重みを感じつつも、わからないからこそ生まれてくる「探求心」からは私たちも得るべきことがたくさんあるはずです。



◆ 「東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ」

万葉集におさめられている柿本人麻呂（かきのもとのひとまろ）が詠んだとされる歌が「東（ひむがし）の野に炎（かぎろひ）の立つ見えてかへり見すれば月傾（かたぶ）きぬ」です。この歌に登場する「炎（かぎろひ）」というのは、「明け方に東方に射す光」を意味しており、東方の野に日の出前の光が射し始めている様子を詠んだ歌で、一方では西の方角を見てみると「月がすでに傾いて沈もうとしている」ことを、続けて詠んでいます。奈良県宇陀市榛原には、柿本人麻呂がこの歌を詠んだとされる「かぎろひの丘（万葉公園）」があり、「かぎろひ」は厳冬のよく晴れた日の、日の出1～2時間前に見ることができる陽光のことであるとされていて、毎年12月下旬（旧暦の11月17日）には、「かぎろひ」を一度は見てみようと多くの人がこの「かぎろひの丘」を訪れるそうですが、なかなか運よくお目にかかるものでもないそうです。柿本人麻呂は、当時、この小高い丘からとても美しい「かぎろひ」を見て、何を思い、何を考えたのでしょうか。